

対談・『国境の南、太陽の西』 (II)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 酒井, 英行, 高野, 圭子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00006767">https://doi.org/10.14945/00006767</a>

## 対談・『国境の南、太陽の西』（Ⅱ）

酒井 英行  
高野 圭子

### Ⅱ 始と男性共同体

酒井 それでは、ここから、始と男性共同体というテーマで、話し合ってみたいと思います。この、『国境の南、太陽の西』という作品は、始という男性主人公の、一人称の語りで進められる小説なので、基本的には、始の、脚の悪い女の子にまつわる女性遍歴を語り出したような作品なので、始と男性との関わりは、正面切っては、ほとんど語られてはいないような作品ですけど。隠し絵のように、っていうのか、脚の悪い女の子の女性遍歴を語りつつ、あえて、語らないフリをして、結構、男性共同体とか、男性ジェンダーを語っている作品なのか、……。語らなくても、まあ、読者は、読みとれるようになっていてる作品だと思っんですけども。

高野 はい、あの、最初に、「僕」は一人っ子だ、っていうことが、すごく強調されていますよね。

酒井 うん。

高野 それで、自分が特殊であるって、……。あの、孤独だとか、孤立しているとかって、繰り返して書いてあります。それが、「僕」のパーソナリティの核であるように、書かれていると思います。でも、確かに、時代的に、一人っ子は珍しかったかもしれないけれど、でも、特殊だって感じるほどのことではないと思うんです。そのことが、強調され過ぎていて、不自然だなって、感じるんです。

酒井 ああ。

高野 それで、なぜ、そんなに、一人っ子だったということが、繰り返し、書かれるのかって、考えてみると、あの、唐突かもしれないんですけど、春樹の初期の作品群に表れる、「鼠」であるとか、ジェイズバーの「ジェイ」だとか、この作品にはいないんだ、って、思ったんです。

酒井 ああ、はい、はい。

高野 春樹が、ずっと書いてきた「僕」という主人公のそばにいた、男性ジェンダーである、「鼠」や「ジェイ」が出てこない。春樹の初期の作品で、常に、「僕」の拠り所というか、帰る場所であったはずの、……

酒井 うん。

高野 「鼠」を求めて、『羊をめぐる冒険』では、「僕」は、旅を、冒険をするという設定にさえ、してあるぐらいです。だから、初期三部作と呼ばれるものとは、この作品は、そこが違う。分ちがたいほどの一体感を、幸福そうに描いてきて、そして、その男の子たちの、別離を、ほんとうに、一大事件に（笑い）、人生の一大事として、書いてきましたからね。それが、この作品では、その二人がいない状態での「僕」を、描いていて、そこで、春樹は、一人っ子だった、特別だったと、協調するわけです。作為的に感じます、とっても。この二人の不在に呼応するかのように、「僕」が一

人っ子であること、孤独な少年であったことが、わざとらしいまでに、強調されているように、思えるんです。ところが、春樹らしさになっていくのかなって、感じますけど。すごく現実的な物語ですよ、たとえば、高校生のときの様子とか、始の家庭生活とか。それなのに、やつぱり、非現実感みたいなもの、よく言われる浮遊感みたいなものが、かもし出されている。一人っ子が、すごく珍しいことのように、書かれているのも、わざと歪んだ、ねじれを出しているように感じますが。だから、私は、「鼠」三部作と呼ばれる作品群からの繋がりを、すごく、感じました、この小説に。それで、先ほど、先生が、おっしゃったみたいに、本当に、「僕」は、徹頭徹尾、独りぼっちで、孤立していたのか、っていうと、決して、そうではないですよ。ちゃんと、あちらこちらに、男の子たちのこと、男同志のことは、書かれていますよね。それなのに、まるで、まったく、それが無かったかのように、語られている。いないのは、「鼠」であり「ジェイ」ではないのに。でも、そのいびつな書き方が、私たちが生きている社会の、男性共同体の在り様というものを、よく表しているんじゃないでしょうか。あの、現実の世界においても、男性ジェンダーにとって、共同体は、あまりに当たり前にあって、無色透明というか、無意識に、無自覚に、存在が受け入れられているんだろうと、思うんです。特に、個としての男性ジェンダー、この場合は、始ですけど、彼にしてみれば、そこにあるのが、自分が、そこに属しているっていうのが、意識することさえなく、当然のことだから、だから、彼は、平気で、自分は、孤独であるとか、理解されないと、言っていられる。ちゃんと、居場所もあり共同体も存在している、そこに、いるからこそ、自他の区別もつかないような、密着した関係である、「鼠」や「ジェイ」がないことで、自分は一人ぼっちであり、孤立していて、特殊であるとかまで、言ってしまう。その自意識ですよ。すごく、春樹は、この辺の書き方が、上手だなって、思います。

酒井 今、高野さんが言った、春樹の初期三部作、とかいわれる、あれは、大学へ入ったころの、青年期のころの、「鼠」

との、まるで兄弟のような、分身のような関係性があって、そこに、年長者の、「ジェイ」っていうのがいて。そういう人物配置を通して、春樹は何を描きたかったのでしょうか？ 言わず語らず、言葉で、話さなくても通じ合うみたいな、……

高野 ええ。

酒井 その、いわゆる男性共同体。そこが、常に帰って行く場所、失いたくない場所として、やっぱり、春樹は描いて。さっき、高野さんが言ったように、この『国境の南、太陽の西』は、あえて、「鼠」とか、ジェイズバーとかを書かずに、始の、高校から、大学時代を、描いていて。つまり、高校、大学時代を、飛ばして語っているんじゃないかと、結構、丁寧な……。まあ、高校時代は、イズミのことがあるから、特に、丁寧に、語っているけども。「鼠」もいなければ、ジェイズバーもない。で、『ノルウェイの森』のような、キズキという、男友だちも、……。正面切つては、描いていない……

高野 そうですね。

酒井 主なものは、イズミ、イズミの従姉とのいきさつを、メインに語っていて。出てこないだけでも、高野さんが言ったように、語っていないのか、っていうと、そうではない、っていうのが、この作品ですね。

高野 その、書き方が、すごく腹立たしいんですけど（笑い）。「僕」は一人ぼっちで、だけど、ガールフレンドはいた、というふうに書かれていますよね。一番顕著なのは、島本さんに関してで、唯一、わかり合える存在が、島本さんだったと、言っているながら、あの、女性ジェンダーを、そういう役割に設定していて、すごく特殊な結びつきが、そこにあったように書いていながら、平気で、自分が、すごく孤独だったとか、誰にもわかってもらえなかったっていうのを、繰り返し言っている。これは、女というものが、始にとつて、理解しあえる存在ではありえない、と言っている

ようなものですよ。女は、「僕たち」という人間関係の範疇には、入っていないという、前提がある。

酒井 うん。

高野 男にとって、社会とか、人間関係とか言うとき、「男たちの」という前提が、無意識にある。それが、今、私たちが生きている、男／女の社会であり、だから、まあ、それを、とてもよく書いている場面だなんて、思いました。

酒井 一人称の語りだからでしょうか、すごくわざとらしく、意図的な語りになっていて、常に、脚の悪い女の子っていうのが、形を変えて、主人公の前に登場してきて。

高野 ええ。

酒井 始がいかにも、その女性存在に関わるかっていうことが、メインの語りになっていきますけど。その裏で、隠し絵のように、男性が存在していて、始っていうのは、実は孤立していたわけじゃない。たとえば、主人公と女性たちとの関わりがメイン・ストーリーの『ノルウェイの森』に、キズキや永沢さんという男性が存在していたように。薬局の娘である脚の悪い女の子とのデートを設定してくれるような会社の同僚もいたわけだし、妻・有紀子の父もいたりして、……

高野 はい。

酒井 表立っては語らないけど、彼には、その時、その時、男性と関わりを持っていたのであり、決して孤立していたわけではなですね。たとえば、高校の時、イズミとキスした後、イズミを裸にし、服を脱がせ、性交するという性的欲望を抱き、そのためには、コンドームを手にいれなきゃ、っていうとき、……

高野 はい、そうです（笑い）。

酒井 ちゃんと、コンドーム入手を頼めるような友だちがいたわけだし。

高野 はい。

酒井 常に、始は、男性共同体の中にいて、男性ジェンダーの仲間にならなくて生きてきた。そこを、あえて、表面の語りにはしない作品ですね。なんか、そこが、変な感じですね、……。

高野 私は、わざとだと思ってるんですけど……

酒井 わざと？

高野 ええ。

酒井 わざとっていうのは、その、語らない形で、読者にわからせるっていう、その、……。表面では、語らないけれども、読者には、わかるように、……。つまり、書かない形で、でも、わかるでしょ、っていうことなのか、読み手が、そうしたいなら、そう読んで下さいよ、っていう感じなのか。

高野 あの、……

酒井 話が飛ぶようですけど、有紀子の父との男性共同体の絆っていうんですかね？ 男性同士のね、男性ジェンダーの

女遊びに関する連帯感。娘・有紀子の夫である始に浮気を勧めているわけで、それは、娘を裏切ることになるわけですね。男は遊んだほうがいいんだよ、とか、俺も若い頃は遊んだよ、とか言ってる。ああいう、男同士の連帯感なんてものは、臆面も無く出すわけだから。そういう、男性ジェンダー、男性共同体の連帯感から、女は、シャットアウトされて、……

高野 はい。

酒井 有紀子は、父と何を話したのって、始に聞いたのに、さっき言ったように、彼は何も言わない。小説としては、有紀子はわかっていたかもしれないけど、現実的な局面として見れば、有紀子は、お父さんと、夫が、どういう話をし

ていたか、まったく知らされなくて、男同士の連帯関係から疎外されています。「僕は妻が妊娠しているあいだに何度か軽い浮気をしたことがあった」、「正直に言って、僕には自分が浮気をしているという明確な自覚すらなかった」という始と、妻（自分の娘）がいる始に向かつて、適当に女遊びをしたほうがいい、と浮気を勧める義父。婚外性愛関係を男の論理で正当化しているわけですが、その意味において、『ノルウェイの森』に似た性愛観だと言えるでしょう。『ノルウェイの森』の永沢さんとワタナベも、愛情と性欲を切り離していますね。まあ、彼らには、真の愛情というものが分かっていないのかも知れませんが。ワタナベには、直子っていう大切な恋人がいて、永沢さんには、ステディな関係の、ハツミさんという彼女がいて。それでも、二人で、街に出て、ガールハントして、不特性多数の女性と性関係を持つっていうね。そういう、男性同士の、性をめぐる連帯感っていうのは、『国境の南、太陽の西』でも描かれていますね。

高野 ええ。あの、イズミとのことで、コンドームをどうにかしなくちゃ、っていう場面でも、そうですね。イズミは、あくまでも、性的な欲望を向ける対象としての女性でしかない、ということが、書かれています。なので、イズミは、始にとつての、……、なんというか、イズミは、始の人間関係の中に、組み込まれる存在ではないということではないでしょうか。彼にとつては、コンドームを手に入れるのなんて、そんなの簡単だよ、って言ってくれた、男友だちの方が、……

酒井 うん。

高野 あの、俺の兄貴が、通信販売で買ったのがいつぱいあるから、あげるよ、って言ってくれた、その、男同士の、……  
酒井 ああ。

高野 女性を性的対象にすることで、まあ、女性を貶めるといふか、そうすることで、生じる、男同士の、あ、うん、の



呼吸の、連帯感、一体感みたいなものが描かれていますよね、ここでは。すごく、自然に、普通の会話として、書かれているから、余計に、それが、現実の社会の在り様っていうか、……

酒井 うん。

高野 それこそ、それは、とりたてて言わないと、気がつかないような、当たり前のことなんだということが、書かれているんじゃないですか。ほんとに、自然なこととして、男たちは、共感し合い、理解しあう。お互い、自明の理で、いちいち、その存在を、意識したり、考えたりすることもないっていう、書き方なんじゃないでしょうか。

酒井 その、コンドームのことで、そういうことに詳しい、高校時代の男友だちっていうことで、そういう、性的なこと、話がわかるっていうて書いてあったか、頼みやすいって、書いてあったか、そういう、……

高野 比較的、詳しくそう、って書いていますね。(笑い)

酒井 詳しくそうとかって言って(笑い)、コンドームのことを、……

高野 友人が、っはつきり言っていますよね。

酒井 言っていますね。そしたら、さつき、言ったところで、兄貴が、通信販売で買って、山ほど押し入れにあるから、一つ二つ無くなったって気がつかないよ、って言ってね。

高野 ええ(笑い)。

酒井 ということは、その友人の兄貴も、頼んだ友だちも、主人公も、女性を性的対象として見ている、というありかたが浮上してきますね。女性存在が、精神的なパートナー・シップを築く存在というよりも、いきなり、コンドームでどうかするっていう、性的欲望の対象としての性的身体に還元されたモノとして捉えられている……。

高野 そうですね。

酒井 その友だちにしろ、そのお兄さんも含めて、始も、高校時代、男社会、男性共同体が、女性を性の対象にするような価値観を、男性ジェンダーが、持っていますよね。

高野 ええ。それは、あの、島本さんが、「スカートの中に、手を入れることばかり考えている男の子」ばかりいて、嫌だったって、大人になって再会してから、始に言いますよね。

酒井 ああ（笑い）。

高野 で、始が、「僕も、同じだったかも」って言って、そのころ、そういう時代に、島本さんに会わなくて、よかったんだね、なんて言いますけど。あと、コンドームのことが、イズミにばれちゃって。

酒井 ああ、そうだったね（笑い）。

高野 どっかにイズミに呼び出されて、……

酒井 屋上。

高野 屋上ですね。そこで、イズミに責められるような感じになって、ちょっと、言い訳したりして、……

酒井 君とのためっていうわけじゃない、とかなんとか、言ってるね。

高野 そうですね。ちょっと、興味があつたんだよ、とかって、ごまかした時に、……

酒井 ああ（笑い）。

高野 その、屋上で、あの、始が、思うことが、「僕らは、ここで、……」、えーと、「僕ら」って言っていたと思うんですけど。放送部のレコードを、僕らは、一度、ここから、投げたことがあるって。

酒井 そうですね。

高野 そういう、屋上から、備品のレコードを投げたっていう、出来事を、思い出すわけなんですけど。私は、この、「僕

ら」って、いったい誰のことだろう、って、考えたら、決して、イズミでは、ないですよね。

酒井 ああ、無論、そうだね。

高野 その、「僕ら」っていうのは、さっきの、コンドームの友だちなんかを含んだ、男の子たちで。

酒井 そういうことだね。

高野 まあ、悪さというか、いたずらを、男の子たちとして、後で、大変なことになった。たぶん、先生に叱られたり、親が学校に呼び出されたり（笑い）、したんだと思うんですけど。そのことを、イズミという女の子に、コンドームのことで、責められているときに、それで、思い出したわけですよ。同じ場所だったから。その落差っていうか、女の子とのことと、「僕ら」男同士のこと、との差異が、すごく、うまく、対照化されて、書かれていると思うんです。ここは。その、男と女の差異ではなくて、男たちという関係性と、男と女という関係性の、差異です。それが、はっきり表われていると思います。ここで、始は、たぶん、イズミの話を聞きながら、「女って、面倒くさいな、わずらわしいな。」って、思っていますよね。

酒井 はい、はい（笑い）。

高野 あの、男の子たちと、レコード投げたりして、いたずらして、悪さして、気心が知れている、そういう友だちと、やったことの方を、懐かしく、っていうか、叱られたけど、あっちの方が、ぜんぜん、楽だっていうか、楽しいっていうか、そういうふうには、思っていたんじゃないでしょうか。

酒井 うん、うん。

高野 それから、あの、トンビのことも、書いていて。

酒井 そう、そう。トンビが出てきたね。

高野 「トンビであることは、きつと素敵なことだろうなと、僕は想像した。彼らは、ただ、空を飛んでいればいいのだ。少なくとも、避妊に気をつかう必要はない。」って。

酒井 はい、はい(笑い)。

高野 ここで、女性の側から言わせてもらうと、男って、ほんとに、どうしようもないな、って(笑い)。

酒井 まあ、そうですね(笑い)。

高野 男性にとつて、関係性というか、理解し合えるという実感は、共同体の中にしかない、っていうことだと思うんです。性差別意識とか、そういうのではなくて、もつと根っここのところで、そうなってしまいうんでしょね、きつと。この小説は、そういう、無意識、空気感、とか、そういう領域まで、それこそ、意識的か無意識かは、わからないですけど、書かれていますと、私は考えます。言い換えれば、男性ジェンダーにとつて、男／女関係、異性愛、っていうのは、私たち、男性共同体というものは、対称ではないということなんです。まして、特別なものなんかではない。なんていうんでしょう、脇に置かれているっていうか。結局、中心と周縁ということ言えば、まさに周縁でしかないっていうことが、描かれているんじゃないでしょうか。

酒井 うん。コンドームのことに詳しくそんな友だちに相談して、一箱譲り受けて、秘密だよ、他の人には絶対に黙っててくれよな、って、わざわざ念を押しておいたのに、彼が喋り、それが広まり、いつのまにか、イズミの耳に入っちゃって。今、高野さんが言ったところで、屋上でね、イズミから、「私のために手に入れたわけなの？」って、聞かれて、「とくにそういうわけでもないんだ」って言うって。

高野 はい。

酒井 そのとき、「急がないで」とかって言われてね。

高野 そうですね。

酒井 「急がないで」とか、「待つてね」とかって言うんですよね。

高野 はい、そうですね。あの、「私のことが本当に好き？」って聞いて。あの、「急がないで」とか、「せっかちにならないで」とかって、言いますね。

酒井 「私のことを好きなの？」って、聞くのは、たぶん、そのことを感じたからでしょうね。つまり、セックスしようとしている、男性の、……

高野 はい、性的な……

酒井 自分が、男性の性的欲望の対象になっているんだ、愛されている、好かれているわけじゃないんじゃないかって、思っ、本当に好き？ って聞いて。

高野 そうですね。

酒井 本当に好きなのなら、待てるでしょう、って。

高野 ええ。

酒井 イズミは、私が自然にあなたとセックスしたいと思うようになるまで、待つていてね、って頼んでいるわけ。それで、そういう、女の子を説得するとか、言い訳するよりは、高野さんがさっき言った、男の子たちと、放送室のレコードを、ぴゅっと投げてる……

高野 ええ。

酒井 レコードが飛んでいく、そういう面白さが、……、男性共同体で、いたずらをしてね、……

高野 それが、イズミと一緒にいる場面で、頭に思い浮かんでいるわけですからね。

酒井 今のところを見ても、主人公が繰り返し、自分は一人っ子だ、とか、孤独で、欠如感があり、欠けているところがあつてね、……

高野 はい。

酒井 言っているけど、本当に語られていることは、そのように、人生のどの時期にも、彼は男友たち、男性共同体の中にいて……。大人になって、教科書会社に勤めている時にも、脚の悪い女の子を、ダブルデートに誘ってくれるような同僚がいたりね。

高野 ええ。

酒井 どこにいても、彼は、男友たちに恵まれていて、決して、孤独でも何でもなかったのに、彼は、孤立していたっていうことを、言っているんだけど、そこが、随分、語りと、結果的に描かれていることと、ずいぶんずれちゃつていて、……

高野 そうです。

酒井 そこを意識しているのか、主人公の、男性共同体で、男性ジェンダーとして、居座つて、女性を傷つけているっていうことを、隠蔽するためなのか、そこが、私は、ちょっと、わからないんですけどね。基本的には、この作品は、始という男性が、女性を傷つける話、「女の子のスカートの中に手を入れることしか考えない」がさつな男の子が、女性を傷つけるっていう話だと、思うんですけどね、結局、この作品を大きく考えれば。

高野 はい。

酒井 男性が男性ジェンダーに居座つて、女性を性的対象にして傷つけるっていうことを隠蔽するために、男性共同体の解放的な親和性っていうものを提示しているのでしょうか？ 始の周りには、常に、男性の友だちがいて、むしろ、

男同士の連帯感の中にいるのですね。

高野 そうなんですよね。

酒井 なのに、孤独だった、独りぼっちで孤立していた、つて盛んに言ってる。だから、島本さんを求めるんだって話に持つていくけど、むしろ、男同士の連帯感によって、女性は締め出されているのではないのでしょうか。

高野 はい。

酒井 だから、義理の父との会食のところでも、有紀子を除外して、有紀子の人格を踏みにじって……

高野 ええ。

酒井 男女を入れ替えてみれば、この場面の男の身勝手さがよく分かりますね。たとえば、妻と、義理の母が、男遊びの話をして、……

高野 妻と、その夫の母、ですよ。

酒井 ああ、そうか。お母さんが、息子に内緒で、嫁と会食して、あなたは、男と遊んだ方がいいよ、そのほうが家庭もうまくいくわよ、しかし、あまりいい男とは遊ぶな、あまりいい男と遊ぶともとに戻れなくなるから、といった忠告をするっていうことが、日本の社会では、考えられないですよ。妻と母親が、……

高野 そうですね。

酒井 でも、男同士は、それを当たり前のごとく……。

高野 はい、……

酒井 義理の父が、男の性欲だけを特化し、夫婦間に倫理的関係性など存在しないかのごとくに、男は遊んだ方がいいんだ、お前が他の女と寝ていても責めないよ、その方が家庭も仕事もうまくいくって言いますよね。

高野 ええ。

酒井 男性ジェンダー役割の無自覚的なエゴが露呈しているところですね。私が、もう一つ、気になるのが、高校時代の

同級生で、『ブルータス』に、始の店の取材記事が載ったのを見て、訪ねてきたって、うんね。

高野 はい、はい。

酒井 この高校時代の友人っていうのが、結構、詳しく書かれていて。

高野 ええ、そうですね。

酒井 この友人に、かなり本質的なことを言わせますね。この世界は、『ディズニーの『砂漠は生きている』と同じで、「みんないろんな生き方をする。いろんな死に方をする。でもそれはたいしたことじゃないんだ。あとには砂漠だけが残るんだ。本当に生きているのは砂漠だけなんだ」と始に向かって言いますね。この高校時代の友人が、突然出現して、「その後のイズミ」に関わる情報を始（と読者）にもたらず、というストーリーを、春樹が仕組んでいて。で、このことを重要視するのは、高校時代に、さつき話に出た、始たちは、放送部のレコードをくすねて来て、屋上から飛ばしちゃって、怒られるような、クラスからはみ出した高校生だったけれども、この同級生っていうのは、サッカーもできれば、勉強もできて、学級委員をするような、優等生タイプだったって、いう設定にしている。

高野 はい。

酒井 だけでも、始のガールフレンドであった大原イズミっていう女の子は、よく覚えていたって……。それは、自分も、イズミのことを、可愛いと思っていたし、いい子で、性格もいいし、キュートだと思っていたからだ、と言いますね。君がそのイズミといつも一緒にいるのを見ていて、羨ましかったと、高校時代の真情を吐露します。この友人も、「女の子のスカートの下に手を入れることしか頭がない」「がさつな」男の子として、イズミを見ていたという設定にして



おいて、その彼に豊橋のマンションで、「その後のイズミ」を見かけたという話をさせますね。

高野 はい。私も、この人、とつても重要だと思っています。

酒井 うん、うん。

高野 あの、さつき、話したように、「僕」が、学生時代、青春の頃っていうか、染まっていたイデオロギーっていうものがあって。でも、今は、彼は、それとは、反対のような、資本主義社会の中で、ちゃっかり適応して、うまくやっている。ですから、そういう自分に、すごく、罪悪感とか、違和感とか、感じている状態にあって……。そのような状況の中で、始は、イズミのことを思いましたんですよね。イズミの従姉の、ニュースというか、葉書ですね、イズミから、イズミの従姉が死んだっていう葉書が、送られてきたことがあるって、書いた後で、……

酒井 そうですね、始に一人目の子どもが生まれた後で、会葬御礼の葉書が送られて来て。

高野 はい。

酒井 で、その葉書に書かれていた女性の名前には、心当たりはなかったのですが、しばらく考えているうちに、それがイズミの従姉であることに気づくわけです。そして、その葉書を送ってきたのが、イズミであることも理解しますね。そこに示されているイズミの「硬く冷たい感情」、イズミは今でも、「僕」のことを許していないことを読み取りますね。

高野 ええ。

酒井 高校生の時、イズミに対してした酷い仕打ちを忘れてもいないし、許してもいないのだ、ということを始め知らせるために、その葉書を送ってきたのだ、と始は理解する、……

高野 そういうエピソードを書いた後で、その、高校時代の、同級生がやってきて、「僕」に、イズミのことを、伝えるわ

けなんですけども……

酒井 うん。

高野 そのイズミを、子どもたちが、怖がる、つていう言い方をして。

酒井 うん、うん。

高野 「僕」に対して、イズミの亡霊を連れてきたのは、この彼だつて、……

酒井 イズミの、何？

高野 亡霊。

酒井 ああ。

高野 まあ、亡霊つていうか、私は、これが、きっかけで、あの、イズミが表れて、それから、島本さんが登場してくる、つていうように、思うんです。

酒井 ああ、そうか。店に、島本さんがやってくるように、ね、……

高野 ええ。あの、それが、現実の存在なのか、幻影、幻想なのかは、別として。この、イズミの話を、彼がしたことによつて、物語が動き始めるつて、考えています。あの、表情のない、子どもが怖がるという、イズミの話を同級生が聞かせることによつて、決定的に、始は、危機を迎えたんだらうと、思うんです。そこから、今、現実の自分と、過去の自分との間を、行きつ戻りつするような、アイデンティティ・クライシスが始まつて、……

酒井 ああ。

高野 今の自分、現実の自分自身を、ただぼんやりと、このままでいいのかな、つて思つたり、違和感を持つたり、つていうだけではいられなくなつた。ここで、彼は、初めて、曖昧に目を逸らしたり、何となくやり過ごしていたものに、

はつきり相対しなければならなくなった。現実には、始が、自己認識の危機的状況をむかえたのが、この、同級生の登場と、発言からだっただろうと、思います。

**酒井** そうすると、春樹は、始を、自分の好きなことは勉強したけど、そんなに優秀じゃなかったし、さっき話したように、レコードを屋上から投げて怒られたりした生徒、「クラスからはみ出した存在」、まあ、優等生タイプからは外れていた高校生として書いておいて、……

**高野** ええ。

**酒井** 今、話題に出ている、高校時代の友人は、まったく反対に、勉強もスポーツもできる、「学級委員タイプ」として書いて。

**高野** はい。

**酒井** 正反対のように見せておいて、でも、イズミをめぐるっては、等距離、あるいは、同じ位置に立たせていますね。イズミに対する欲望の形の相似形。その友人は、高校時代にイズミのようなガールフレンドが欲しかったのは、イズミが、特別美人というわけではなかったが、魅力があり、人の心を掻き立てるものがあつたからだ、と言います。

**高野** そうですね。

**酒井** 始も同じようにイズミを語り出していますね。イズミは、「それほど綺麗な娘ではなかった」が、「自然に人の心を引きつけるような素直な温かさがあつた」と。

**高野** ええ、はい。

**酒井** 始とその友人は、イズミに対して同じものを感じ、同じ評価をし、同じ惹かれ方をしているわけですね。同じクラスにいた二人が、イズミという女の子に対して、同じ欲望の形を抱いていたということ……

高野 「性格もいいし、キュートだった。とくべつ美人というわけじゃない。でもなんというか、魅力があった。人の心をかきたてるものがあつた。そうだろう？」って、言っていますね。

酒井 始がイズミを語り出す言い回しと同じですよ。

高野 ええ、まったく同じですね。

酒井 同じ評価をしていて。それで、始とそのイズミがつき合うのを見て、羨ましいなって思っていたから、イズミの顔をはっきりと覚えていた、イズミの顔が頭の中にくっきりと焼きついているんだよ、だから、豊橋のマンションで見たのは、イズミに間違いないよって言う。

高野 そうです。

酒井 そこで、私の好きな言葉で言うと、分身でね、……。

高野 はい。

酒井 始とこの同級生は分身で、はみ出し者と、優等生、心理学的に言うと、シャドウとペルソナということになりますかね？ エゴとスーパーエゴ、……。分身であるんだけど、反対のものを、始とこの高校の同級生に付与して、春樹が人物造形している。「学級委員タイプ」ということだから、倫理性のほうを高校時代のこの友人に与えていて。その倫理的存在の口から、今の話を始に伝えるって、設定に春樹はしている。

高野 はい。それで、尚かつ、現在のイズミの様子について、君のせいじゃないって、年月つていうのは、人を、色々なふうに変えていっちゃうんだ、つていうようなことを言ってくれますよね、彼が。まあ、始が、その、イズミの変貌というか、今、表情というものが、まったく無くて、イズミのことを、子どもが怖がるって、聞かされて、ショックを受けるわけですけど、それに対して、慰めてくれるというか、……

酒井 うん、……

高野 君のせいじゃないよって。程度の差こそあれ、誰にだって、そういう経験はあるんだって、言ってくれるんですよね。なんていうか、「僕」が言ってる欲しいことを、この、高校時代の同級生の男の子が、ちゃんと言ってくれる。私は、その、理解というか、共感というのか、男同士っていうのは、本当に……

酒井 私も、今のところは大事だと思っただけです。主人公は、『ブルータス』の記事を読んで欲しくなかった、って思いますね。自分が高校のとき、イズミに隠して、イズミの従姉とセックスすることで、イズミを裏切り、イズミは決定的に傷つきますね。その結果、イズミはつまらない大学に入っちゃったのに、主人公は、すんなりってと東京の大学に入ってる。

高野 そうですね。

酒井 自分だけが、『ブルータス』に載るような成功者になり、うまく世の中を渡っているっていうことを、イズミにだけは知られたくないと思う。主人公が、強い罪意識を、イズミに対して持っているからですよ。それを、今、高野さんが言った、高校の友人という、始の分身を借りて、他人の人生は他人の人生であり、君の責任ではない、というようになことを言いますね。なんとという言葉を使っていましたかね……。

高野 「誰かの人生というのは結局のところその誰かの人生なんだ。君がその誰かにかわって責任を取るわけにはいかないんだよ。」って、言っていますね。

酒井 うん、そうですね。イズミが決定的に深く傷ついたのだから、別に始の責任じゃなくて、イズミ自身の問題であって、イズミの人生にまで、責任持つ必要は君には無いんだって言ってくれるんですよ。

高野 ええ。すごいですよね、この共感する力って。お互い、言ってる欲しいことを、言い合っちゃって（笑い）。ほんと

に、こういうところ、春樹は、うまいなって、思いますね。そして、素直に、受け入れちゃう、読めちゃうっていうのが、あの、……

**酒井** うん（笑い）。今、高野さんが、言った文章が効いているからだろうね、やつぱり。

**高野** はい。

**酒井** 誰かの人生っていうのは、その誰かの人生なんだ、っていう、ね。で、そう言ってくれて、とりあえずは、罪意識は免除されるだろうけれども、そう簡単にはいかないわけでしょうね。そんなに簡単に罪意識が解除されるようでは、主人公にはなれないでしょうし、小説も成り立たないでしょうからね。

**高野** そのとき、例によって雨が降っていて、青山では。で、「壁に焼きつけられた影のように。」って、始くんは、言っていて……

**酒井** それは、どういう、……

**高野** あの、「いたるところに腐敗と崩壊の影がうかがえた。そしてそこにはまた僕自身も含まれていた。まるで壁に焼きつけられた影のように。」って、この場面の、終わりですけど。

**酒井** それは、つまり、友人が、君が責任を負う必要はないんだよって、言ってくれても、子どもが怖がる存在になり、旧姓のまま、大原イズミのままで、一人でマンションで暮らしている、っていうことを、やつぱり、ずしっと受け止めていて。友人の言葉によって、自分がイズミを傷つけた罪が免除されたというふうには思えない、ということを春樹は書いているのですか？

**高野** あの、罪が免除されたとは、もちろん思っていないでしょうけど、……。あの、ここから、腐敗と崩壊の影、と表現されるような、そういう世界に、入り込んでいったというか、……

酒井 ああ。

高野 この、高校時代の友人の出現によって、彼が、イズミのニュースを持つてきたことよって、始は、さっき言ったところの、「壁に焼きつけられた影のように」ってあるように、彼が、ずっと、持ち続けていた、イズミへの罪意識にしろ、島本さんへの憧憬にしろ、それから、自分自身への、自己愛というか、誰にも理解されない、特殊で特別な存在であるところの自分という、長年持ち続けた自己像みたいなものも含めて、記憶とか、非現実とか、幻想とかいうような所へ、そちら側へ、引き寄せられていったんだと思うんです。焼きつけられた影って言っているように、その、そちら側の世界の入り口が、ここで開いたっていうか。ですから、さっき言ったように、この物語は、ここから始まった、と言えるんじゃないかと、私は思うんです。ここが、出発で、島本さんとの温かい思い出とか、逆に、現実への拒絶感とか、そういうものが、むくむくと、その、入口から湧いてきたんだらうって。

酒井 うん、うん。

高野 この、『ブルータス』を読んで、友だちが訪ねてきたっていう設定も、なんというか、春樹らしいというか、うまいなって思いますね。『ブルータス』っていうのが（笑い）。

酒井 そうだね。

高野 すごく、流行ものつぼく書いていて、ちゃらちゃらした感じを、醸し出しつつ（笑い）、そういうところに、こういう、キーになる人物とか、実は、重いテーマとかを、持つてくる。そういうのが、天の邪鬼というのか（笑い）、やるなって、思いますね。

酒井 その、友人によつて、とりあえず、表面的には、始の罪は免除されたようなんだけど、それで罪が免除されてしまつたら、小説にはならないのでね。

高野 はい。

酒井 犯した罪を背負い続けさせ、苦悩させなければね、主人公なのですから。

高野 ここで、イズミの存在というものが、現実感を持つようになりませうね。その、たとえば、幻影であったとしても、それが、ありありと、始の中で、イメージされるようになったでしょうし。今、三〇代の女性として、生きているイズミというものが、映像としても浮かぶし、リアルに、迫ってくるようになったらうと思います。過去の、悔恨の中にいた、繰り返し思い出した、高校生のイズミではなくて、現実の、自身の、生きているイズミが、始に迫ってくる。そして、もっと言えば、そのイズミと向き合ったことで、始は、島本さんをも、呼び出したんだらうと、私は、思うんです。

酒井 大学に入るために上京する新幹線の中で、自分がいかにイズミを傷つけたかを痛感し、その体験から、自分が悪を成し得る存在であり、また、いつか、誰かを傷つけることを免れない人間だらう、ということを感じますね。大学に入ってから、新しい人間になることよって、「過ちを訂正」しようとするのですが、「僕はどこまでいつてもやはり僕でしかなく」、同じ過ちを繰り返し、同じように人を傷つけていくことになるだらう、という思いを抱くのですね。しかし、その思いは十八歳の大学生の思いに過ぎず、イズミへの罪意識を忘れてしまったのではないでしょうが、東京での大学時代に、何人かのガールフレンドを作って、三年生の時には、同棲までしたとか。

高野 ええ。

酒井 大学を出て、教科書会社に入ってから、意識的に島本さんの面影を追っかけるわけじゃないのですが、「脚の悪い女の子」ということを聞いたなら、デートしてみたいっていう気持ちを、抑えきれなくなると、デートします。結果的には、島本さんを求める行為ですね。大学時代も、社会に出てからも、イズミを決定的に傷つけたこと、自分



が自分であることによつて、他人を傷つけてしまうことを忘れたかのごとく、女性遍歴を繰り返しています。そして、三十歳の時、有紀子と出会つて、結婚する。結婚生活は、申し分無く、店の経営は順調。子どもにも恵まれて、つていう、順風満帆の人生を送っている、まさにその時、イズミのことを知らされるつていう、ストーリーを仕組んで、……。だから、高野さんが言ったように、そこから小説は始まる、と言えます。三十六まで、高校生の時に犯した過ちを忘れたかのごとく、生きてきて、……

高野 まあ、本人は、忘れていないつて、思つていたでしょうけども、……

酒井 どこで、分かりますか、それは？

高野 ときどき、思い出して、ああ、イズミが、とか……、島本さん、とか……

酒井 島本さんは思い出すけど、イズミは、……

高野 あの、「あなたは、きっと特別なことをするわ」つて、イズミが言ってくれたことを、思い出したり……、

酒井 ああ。でも、それは、イズミが、ああ言つてくれたけれども、つて、苦々しく思い出すんじゃないか？ 「あなたは特別な人だから、偉くなるわよ」つて言つてくれたけど、教科書会社で無意味な仕事をしている自己嫌悪から、イズミの言葉を苦々しい気持ちで思い出すんじゃないか？

高野 それは、そうですね、イズミならつて、いうところがあつて、……。「島本さんなら、あるいは、イズミなら、僕は自分の気持をもつと正確に表現することができるんだ。」

酒井 ああ、そうだね。

高野 「僕は、イズミと仲直りをする方法を考えたり、島本さんと、再会する方法を考えたりして、時間をつぶしたものだつた。」つて、あるので。

酒井

うん。でも、それは、イズミを傷つけたっていう意識ではなくて、むしろ、キュートで、人の気持ちを和らげるようなイズミを懐かしく思い出しているのですよ。甘美な思い出の中のイズミ、言わば、始の自己愛ですね。「自然に人の心を引きつけるような素直な温かさ」があつたイズミ、慈母、聖母マリアのようなイズミ。今の自分の孤独感、生き難さを救ってくれる、お母さんのなものととして、イズミを思い出しているのであつて。イズミを傷つけた罪、そのことによるイズミの苦しみっていうことは、まったく抜け落ちていきますよね。

高野

そうですね。それが、なんとも都合が良いというか(笑い)。あの、必要なときに、イズミとか、島本さんのことを、思い出すんですよね。たとえば、なんとなく、罪意識を感じて、自分を罰したい気分の時とか、自己否定的な状態になると、イズミを傷つけたことを思い出して、「僕」って、ほんとうに悪い男だったって、そういう記憶に浸るんですよね。だから、たまに、そういう気分のとときに、思い出すことがある、っていうことではないわけです。その都度、必要に応じてというか。たとえば、イズミが自分のことを、「あなたは、素晴らしい人になるわ」って言うてくれた、そのかわいいうイズミを思い出すこともあれば、自分が、ひどく傷つけた女性として、思い出すこともある。でも、まったく、思い出さないで、他の女にかまけていることもある。勝手なものですよ(笑い)。自由自在です(笑い)。そうやって、始は、三十数年生きてきて、ここに来て、転機というのか、まあ、人生の中での、立ち止まる時期なんでしょうか、そういう時を迎えた。もう、四〇歳を前にして、家庭も家族も、社会的地位もある自分を、受け入れなければならぬ時ですよ。こんなの、本当の自分じゃない、なんて、言うてはいられない(笑い)。その、きっかけが、『ブルータス』を見て、やってきた、始の分身とも言える、男性の友人だったんだらうと、思います。今も、生きているであろうイズミを、始の前に連れてきた彼が、スイッチを入れたんだって。

酒井

ですから、ストーリーとして不自然でなく、『ブルータス』に載ったから、色んな友だちが訪ねて来て。

高野 はい。

酒井 で、その、最後のお客さんが島本さんだったってことで。

高野 ええ。

酒井 不自然ではなく仕組んであるんだけども。島本さんが現れる前に、始の分身とも言える高校時代の友だちが店にやって来る、というストーリーを仕組んでいますね。その友だちから、現在のイズミの悲惨な人生について知らされます。その時の始は、経営している店の経営は順調で、青山に4LDKのマンション、箱根に別荘を持ち、車は、BMWとジープ・チェロキーを持って、子どもにも恵まれ、「非のうちどころのない幸せな家庭」であって。

高野 はい。

酒井 主人公がそのような人生を歩んでいて、それではいけないと、春樹が思っているから、そこに、イズミのことを知らせる友だちを、……。一人目の子どもが生まれて、「少ししてから」、会葬御礼の葉書がきて、そして、今度は、この友人の口から、イズミの現状を聞かされるといふ駄目押しストーリー。このストーリーによって、春樹は、主人公に、イズミを傷つけた罪だけではない、「僕はどこまでいってもやはり僕でしかない」、主人公がまさに男であることによる罪をも突きつけているのだと思います。能動的な性的欲求が女性を傷つける「悪」。僕という人間が究極的には悪をなし得る人間であるという事実」に真摯に向き合うべきだったのですね。イズミの従姉になした「悪」です。「この女と寝たい」、「この女と寝なくてはいけない」という「吸引力」を感じて、「二カ月間に亘って脳味噌が溶けてなくなるくらい激しくセックスした」と始自身が語っていますね。「ただただ性交をしていただけ」の二カ月間。性欲が身体内部で暴走している始の視点でしか語られないイズミの従姉、彼女は奔出する始の性欲によって、どうなったのでしょうか。その時の彼女については、何ひとつ書かれていませんね。その彼女の三十六歳の死。なぜ死んだか、

死因について、春樹は語らない。死因の伏せられた三十六歳の死、そこに、不自然に歪められた何かを感じられます。現実の女性として見れば、語られない死因を知ることができませんが、イズミの従姉は、小説中の人物です。彼女について、読者に知らされている情報は、彼女も「一人っ子」だということ、イズミを裏切る形で、始と二ヶ月間、「会うたびに四度か五度は性交した」ということだけです。小説中の人物の死因は、この始との過剰なセックスに特定する他ないですよ。イズミを裏切ることになる性愛行為に誘い込んだことに力点を置いて考えるべきか、互いに愛もない、刹那的な過剰なセックスに耽ったことに力点を置いて考えるべきかは分かりませんが、三十六歳という若さでの死が、この時の始との性愛行為に起因していることは確かですね。「悪をなし得る人間」である始の犯した罪……。イズミから送られてきた会葬御礼の葉書を見て、始はおのれのこの罪を強く感じるべきだったのに、イズミの従姉の死を、「彼女がどうして死んだのか、僕には見当もつかなかった」と素通りして、その葉書を送ってきたイズミの心だけに思いを巡らせませす。今でもイズミは自分を許していないんだということを知らせるために、葉書をよこしたのだ、というふうには。イズミのことしか考えない。しかし、イズミを傷つけた罪に向き合うかというところ、そうでもない。高校時代の友人から、イズミの激変について聞かされた後でも、島本さんが目の前に現れたら、もう島本さんしか始の心に存在しなくなります。島本さんの幻想、小学生の島本さんの追想にのめり込んでいって、イズミのこととは失念してしまふ。イズミを損なった罪に向き合うべき機会を与えているのに、始は、島本さんの幻影を追い掛けることにのめり込んでいってしまいますね。

**高野** 私は、あの、ここで、高校のときの友だちが持ってきたニュースが、島本さんではなくて、イズミだって、いうことが、すごく重要に思えます。島本さんを見かけたよ、っていう話じゃなくて、イズミを見たっていうのが、……

**酒井** うん。

高野

それは、あの、さっきから、何度も言っているんですけど、三十六、とか三十七歳になって、何故か、社会的に、……、何故かかっていうか（笑い）、社会的、経済的に成功してしまって。義父に、……、結婚したときは、そんなつもりは、全然なかっただろうけれども、たまたま、結婚した有紀子のお父さんが、ばりばりのやり手だったわけです。そういう、巡り合わせの中で、なんだか知らないうちに、資本主義社会の中で、成功して、その一員になっている自分。そして、子どももいて、マンションもあって、外車も買って、っていう、そういう自分に対して、始は、すごく、違和感がある。なんていうか、自分を許せない、許容できないというか、こんな自分が、本当の自分ではないと思っている。それが、彼の、現時点だと思うんですよ。そして、後から、有紀子が登場して来て、明らかにされるのですが、お互い、表面上は、うまくやって、幸せだったんだけど、実は、この夫婦は、ちゃんと、真正面から、関わりあって来なかった。だから、表面上は、何もかもうまくついていたように見えるけど、始は、空虚さ、っていうようなものを、家庭生活にも感じていた。そして、四十を目前にして、このままでいいのかって、このまま、義父のようになっていって（笑い）、いいのかって思ったんでしょね。有紀子との、穏やかで、幸せな生活が、偽りだつて、気がついていっているのに、平気で続けていけるのかとか。それで、そういう、なんとなくとか、違和感とか、罪意識とか、感じていて、曖昧にごまかしているような、状況のとき、イズミが、今も、生きているという事実を知った。しかも、不幸、恐怖、怒りなど、負の感情を、すべて引き受けているような、三十過ぎの女性として。始に、自分が、悪を成し得る人間だと、刻み込んだのが、若さの盛りに傷つけた、イズミです。ここで、そのイズミが、甘い青春の悔恨の中の彼女ではなくて、生きながら葬られて、亡霊となったような、姿となって、まず最初に現れた。そして、そのイズミと二重映しになるように、その後、美しい島本さんが、登場する。このへんが、すごくうまいなって、思います。

酒井

その島本さんが現れて、島本さんの幻影を追っかけて、島本さんの幻想で始の思考は塗りつぶされます。それで、

箱根に行って、『国境の南』のレコードを聞くわけですが、その翌日、忽然として、島本さんが消えてしまつて。もう、島本さんが現れることは、絶対にないんだつて、思つたとき、……、外苑東通りで、あ、島本さんだ、つて、思う女性を見かけるのですが、しかし、それが島本さんではないことにはつと思ひ当たりますね、島本さんとは逆の脚をひきずっているし、島本さんの脚はもう悪くない、ということに気づいて。

高野 はい。

酒井 島本さんではなかつたとわかつた次の瞬間に、イズミの顔が目の前にあつたのですね。前には、イズミの消息に導かれるかのように、島本さんが現れ、今度は、島本さんの幻影に先導されるようにしてイズミに出会います。このプロットからわかるのは、イズミと島本さんとが、鏡像つていうか、……

高野 そうですね。

酒井 逆の脚を引きずっているつていうのは、鏡に映っている島本さんとも言えるわけで、それがイズミに反転する。目の前に、タクシーに乗つたイズミの顔があつた。始は、タクシーの窓越しに、イズミの顔、表情というもののない顔、言わば、顔の無い顔を見るのですね。

高野 ええ。

酒井 「ほとんど無意識に手をのびして」、タクシーの窓ガラスに触れ、「僕はガラス越しに、イズミの顔のない顔をゆつくりと撫でつづけた」と語っています。ここは、始が初めて、イズミに向き合つた局面として読めます。『国境の南、太陽の西』において、始が本当になすべきことは、イズミに向き合つて、イズミに犯した罪を償ふことだと思ひます。高校卒業以後、彼はそこから逃げ回っていたわけです。作品の結末間際で、島本さんの鏡像を介して、イズミの顔にガラス窓越しに触れたわけで、そこでようやく、イズミに向き合つたつていうふうには読めると思ひます。始が

気がつかなかっただけで、イズミは、いつもどこかで、始を待っていたのだという表現がありましたよね。

高野 はい。

酒井

「彼女はおそらくいつもどこかで僕のことを待っていたのだ。どこかの街角で、どこかのガラス窓の奥で、彼女は僕がやってくるのを待っていたのだ。彼女はじつと僕を見ていたのだ。僕にはそれを見ることができなかっただけのことなのだ。」とありますね。「待っていた」というのは、始を受け入れる者として、という意味ではなくて、罰する者として、ということだと思えます。始の犯した罪に正面から向き合わせるために、「待っていた」のでしょうか。イズミは、「いつもどこかで僕のことを待っていた」のに、始はそのイズミの顔に気づくことなく生きてきて、作品の終局でやっと、島本さんの鏡像に引きずられて、イズミに、そして、イズミに犯した罪に直面したのでしよう。

高野

あの、始を支えるというか、癒す存在として、島本さんの幻影が必要だったと思うんです。そのために、始が、島本さん呼び寄せた。最終的には、始が、島本さんと一緒に死ぬっていうことで、まさに、現実をシャットダウンする形で、島本さんは、自分を、非現実というか、そちら側に、連れて行ってくれる、存在だったと思うんですけど。あの、始の前から、島本さんが消えてからも、始は、島本さんワールドの中（笑い）にいて、有紀子と向き合うこともできなかったですよ。そのときに、島本さんみただけど、島本さんじゃない女を見かけたら、そこに、イズミが現れたってというのは、……。あの、私は、始の、イズミへの罪意識っていうよりも、島本さんが、裏返ったらイズミだった、っていうか……。うまく言えないんですけど、……

酒井

うん。ですから、鏡像っていうのは、島本さんだと思っただけで追いつけていっただけで、イズミだった、という鏡像関係で。反転図形のように、島本さんだったり、イズミだったり、っていうことで。ですから、確かに、イズミの罪に向き合ってた決め付けないほうがいいのかもしれないですね。あるいは、罪に直面したのだが、心底それを咀嚼できないままに、

また、島本さんの幻想にのめり込んでいった、と読むべきかもしれませんね。

**高野** イズミが、その、表情のない顔だった、っていうのは、まあ、生気のないというか。

**酒井** はい。

**高野** それは、やっぱり、死、だと思っただけですね。始が、島本さんと、川へ行っただけのこと、私は、それは、喪の儀式、お葬式だったと思うんですけども。その、このときの、イズミの顔の表現の仕方は、あの、高校時代の友人が使った言葉にしても、タクシーの中のイズミに出会ったときにしても、みんな同じで、ある意味、デスマスクであり、それは、死を、意味していたと思います。

**酒井** 石川県のある川に行ったとき、島本さんが急に血の気がなくなりそうですね。その島本さんの目には「表情というものがまったく浮かんでいなかった」と語られていて、タクシーの中のイズミとの重なりを示していますね。その表情のない島本さんの瞳を覗き込んだ始は、「瞳の奥は死そのもののように暗く冷たかった」と言っています。

**高野** はい。

**酒井** その時の島本さんは、まさに死んでいたのだと言っても過言ではないですね。「島本さんの顔は紙のように真っ白になっていた。そして顔ぜんたいが、何かを塗られたみたいにならなかつた」のですから。この島本さんとタクシーの中のイズミとの重なりから見れば、タクシーの窓越しにイズミの顔に触れた時に、始が罪と向き合ったと考えるよりも、死と向き合ったと考えるほうがよいのかもしれないですね。死の深淵を覗き込んでいるのか？ しかし、始が島本さんやイズミに見た死は、彼女たちの死というのではなく、いつか、始自身が行き着くものとして意識されていますね。島本さんと歩いた石川県の川辺の風景を見て、「きつといつかこの光景を、どこかで目にするようになるんだろうな」と思った。それはいわば既視感の逆だった」と言っているように、始にとっては、島本さんやイ



ズミの死は、自身がいつか行き着く場所として意識されています。

高野 ええ。

酒井

表情というものが無い、死んでいるイズミに触れた後、始は、青山墓地の中に停めた車の中で、「ひどく気分が悪く」なり、一時的な仮死状態に陥りますから、死つていうのが、……

高野

最後の、そのイズミの顔を見てから、あまり、島本さんの幻影を見なくなったって、「僕」は、言っていますよね。この場面での、イズミの登場、イズミとの対面によって、結末をむかえた、何かが終わったっていうのを、始は感じていると思います。それは、誰のせいでもなくて、あなた自身、罪を成す存在、悪を成す存在としての自分の責任なんだから、イズミが、言っているとありますが、それは、始自身が、言っていることなんじゃないでしょうか。イズミの像を借りて、始自身が語っているんだと思います。このとき、彼が、自身で紡ぎ出した幻想が、終わったっていうことを。

酒井 そうだね。

高野

なぜ、イズミが、始くんの、危機のときに、死体、というか、死者のような状態で登場したのか、あるいは、最後に、島本さんの幻想との決別のときに、イズミの顔のない顔と対面するのかっていうことを、考えてみると、「僕」が、イズミを決定的に、損なつた、傷つけたっていうことで、高校生、十代の少年が、女性に対して、この場合、イズミがその表象となるわけですが、抱いた、贖罪の意識つていうものが、確かに働いているのだろうとは思いますが。ただ、それは、イズミを、「僕」が傷つけたっていう、若い頃に良くある話、としてだけ、描かれているのではないと、私は思うんです。春樹が、島本さんに言わせているように、高校生の男の子たちが、女の子のスカートの中に、手を入れることだけを考えている。あるいは、始が、結婚してからも、快樂のために、色んな女性と肉体関係を持つんだけど、

それを、浮気でさえない、っていう言い方をする。相手の女性が、何を思っているのかなんて、考えたこともない、って言います。そのように、女性とのセックスを語っている。そして、始は、相手の女性も、自分と同じ気持ちでいるに違いないと、思っていますよね。だけど、それは、始の一方的な思いこみであって、あの、有紀子に言わせると、「あなたは、何もわかっていないのよ。」って、いうことになるんですけど。そういうことを考えると、この小説においての、始とイズミの関係は、ただ単に、高校生の男の子と女の子の、一つの思い出話という、範疇は超えていると、思うんです。ここには、私たちが、生きている現実の社会での、ジェンダー差異っていうものが、見事に描かれているのではないのでしょうか。男性ジェンダーと女性ジェンダーの間の、特に、性、肉体、快楽、に対しての、思いや、意識の違い、落差、っていうものですね。それは、さっきの、義父と始の会話に、あったように、……

酒井 ああ、はい。

高野 男性共同体では、性的なことでは、あつという間に共感しあえるし、すぐ一体感が生まれるんですよね。同じ価値観で。そして、そのときには、必ず、女性は、貶められるというか、性的な対象、快楽のためだけの存在というところへ、置かれてしまうわけです。この作品中での、高校のときの、コンドームのエピソードの場面でも、そうでしたけども。それが、まったく、罪悪感も無しに、まるで、笑い話のように、男同士の話っていう形で、書かれています。しかも、男性だけではなく、女性にも、それは当たり前のことだ、として受け入れられるであろう、という前提で、書かれているように感じます。言説というか、男性の価値観が社会全体の価値観となっている、ということだと思えますが。女性に対する事柄であるのに、男性側からだけ語られ、それが、事実として、流通し、習慣化している。そういう、あきらかに、今、現実存在する、性にまつわる状況を、それは、結局、構造であるわけなんです。それを、春樹は、この作品でも、しっかり、書いています。そして、それを書くということに、そのような現

実の社会で、男性として生きていくことへの、罪意識っていうか、加害者意識っていうか、春樹の、そういうものが、表現されているように思うんです。それを、意識して、わかっているって、言いきつていいのかどうかわかりませんが。男として生まれ、男として生きていくことで、いかに、女性たちを、損なってきたか、女性を見下ろし、痛めつけているのかっていう、認識が、春樹にはあるように、私には、感じらるんですけど。

**酒井** それは、今、イズミとの関係において話してきましたけど、イズミの従姉と脳がとろけそうだったっていうほど激しくセックスして、それが、イズミにばれて。その言い訳として、イズミの従姉とのセックスは「決して本質的なことではない」と言ってる……

**高野** はい、そうです。

**酒井** イズミとの愛情関係には、全く関係ない、本質的なことじゃないんだとか言いますが、それなら、イズミの従姉の存在は、始にとつて何であつたのでしょうか？ イズミの従姉とセックスした理由を、「吸引力」を感じて、「この女と寝なくてはいけないと思った」と言い、相手も寝たがっていると感じたからだと言っていますね。まあ、始の直感が当たっていたからこそ、二カ月にわたつての性愛関係が成立したのでしょうか。その意味では、非対称の性的欲望ではなかつたのかもしれませんが、……。だけど、春樹は、三十六歳でイズミの従姉が死んだって書いて、……

**高野** ええ。

**酒井** 「この女だつて僕と寝たがっていると本能的に感じた」という主人公の思い込みが、イズミの従姉という女性存在から乖離していたことを、作者の春樹は、彼女の早すぎる死によって示唆しているように思えます。

**高野** そうですね。そこに、加害者と被害者っていうか、……

**酒井** うん。

高野 はっきりとした構図があつて。女は、三十六歳で、若くして死んで、男は、生き残つて、社会的に成功しているつていう、そういう、差異が、図式化されていると思います。それは、意図的に、図式化していると思います。

酒井 『国境の南、太陽の西』で、春樹は、一貫して、男性ジェンダーを図式化していますね。義父と始は性愛関係においては同類です。始は、妻が妊娠しているとき、何度か浮気するわけですが、自分の性欲を自然のものとしています。「自分が浮気しているという明確な自覚すらなかった」と言い、妻を裏切る行為だという自覚が欠如しています。男性に性欲があるのは自然で、それを女性の身体によつて満たすのが当然であるという考え方は、『ノルウェイの森』では、永沢さんの繰り返し返されるガールハントで描かれ、『ダンス・ダンス・ダンス』の主人公を通して、ユキに向かつて、「性欲というものがあるんだ」「女の子と寝たいと思う。自然なことだよ。種族保存のために……」と説明されています。

高野 はい。

酒井 要するに、男の性欲っていうのは、自然に備わつていて、それは、放出するものだ、女性の身体を通して、放出するのが、当然だつて。これは、春樹の作品では、男性ジェンダー、男性に対する考え方で、春樹は、それを、臆面もなく、どの作品にも、無防備に出して。

高野 ええ、そうです。

酒井 空を飛ぶのがすごく気持ちが良いくて好きな鳥だとして、その鳥が「飛べない日が続くと力も余るし、苛々してくる。自分が不当に貶められているような気がしてくる。どうして飛べないんだと腹も立つてくる。こういう感じわかる？」「それが性欲なんだ」と、ユキに比喻を使つて説明して、自分がコールガールとセックスしたことの自然さを述べますね。

高野 はい。

酒井

男性の性欲を自然なものと思え、それを解消してあげるのが女性のジェンダー役割であるという男女観。『ノルウェイの森』でも、緑がワタナベを手で射精に導き、その後で、緑の手作りのご馳走を食べさせ、「沢山食べていっぱい精液を作るのよ」、「そしたら私がやさしく出してあげるから」と愛情表現します。春樹は、無邪気に、男性の性欲ってこういうのを、肯定的に、……

高野

いや、肯定的ではないと、……

酒井

肯定的じゃない？

高野

ええ。それは、すごく、逆説的っていうか、これが、今の、現実の世界の在り様なんですって、明らかにしているのだと思います。だから、春樹は、自分も、その一人なんだって、ちゃんと、わかっただけで、傷ついているっていうか、共犯者として、自らに刃を向けていると、感じるんですけど。そのうえで、男の性欲は、本能なんだとか、愛なんてなくても、ただ、性欲だけがあるとか、それこそ、臆面も無く、書いているように、思えます。さっき、言ったみたいに、男性の性的衝動に対する、甘さというか、容認する度合いの高さは、男性共同体では、勿論ですけど、女性も、しかたないこと、っていうか、この社会はそういうものっていうことになっていますよね。決して正しいことではない、公正なことではないのに、定説というか、価値観が固定化、習慣化していると思います。それを、春樹は、わざと書く。自分も、その片棒をかついでいるって、まあ、加害者側にいるって、いうことで、それを書くわけです。もちろん春樹は、声高に、そういう、いびつな現実や社会を、批判することはしない。けれども、決して肯定しているわけでも、男ってこういうものだから、勘弁してよって、言っているわけでもない、私は、思うんですけど。

酒井

『ノルウェイの森』の永沢さんのことを、ワタナベは、奇妙な男、「まともじゃない」と言いますね。でも、ワタナベは、永沢さんをそのように評価しながらも、永沢さんと一緒に行動していて、……

高野 一緒に、女の子と遊びますよね。

酒井 女の子の取り替えっこまでして。

高野 はい。

酒井 自分と寝た女の子は七十五人くらいだが、そんなのは女遊びとも言えない、「ただのゲームだ。誰も傷つかない」と言う永沢さんに対して、ハツミさんは、「私は傷ついてる」って、抗議はするんだけど、結局のところ、永沢さんが好きだから、待つしかないの、と受け入れますね。『ダンス・ダンス・ダンス』の、鳥の例のように、男性の性欲っていうのは、当然あって、それは、女性の体を通して、放出しなければ、男っていうのは、いたたまれないんだっていうことを、やっぱり、肯定、……って、いうか、自然なことっていう受け止め方が、春樹にはあるんではないのかな？

高野 あの、この間、大学院の留学生の女子学生さんと話をしたときに、彼女が、どうして、春樹の作品には、こんなセックスシーンが多いんだろうって、疑問に思うって言うていたんですね。だから、嫌いだって、読むと、嫌な気持ちになるって、彼女は言うていたんですけど。それは、あの、『国境の南、太陽の西』の授業で、発表したときに、この作品が、女性を蔑視しているように、それは、無意識かもしれないし、故意かもしれないけど、とにかく、それを感じる、っていう発表をしたことに、関して、彼女が、質問してきてくれたんですね。確かに、春樹のセックスシーンの描き方に、女性嫌悪、あるいは女性蔑視を、……。あの、そういう表現が相応しいかどうかかわからないんですけど、性的関係において、男性から、女性を下に見るといいうか、先生がおっしゃったように、性欲の対象にか見ていないんだ、っていうことを、感じるの、読んでいて、すごく嫌な気持ちになる。その、留学生の彼女は、なぜ、春樹は、それを、何度も何度も、書くんでしょうか？ っ、怒りつつ（笑い）、質問してくれたんです。『ノルウェイの森』なんて、もう、いい加減にしてよ、っていうぐらい多いし、これでもかかっていうふうに、書くじゃない

ですか、春樹は。私は、それを、春樹が、あの、私たち、女性が、そういう小説を読んで、嫌な気持ちになるって、気がつかないはずはないし、男／女という関係に、明らかに権力構造があつて、上／下、強者／弱者、が存在するっていうことを、春樹が、知らずに、小説を書くはずがないって、答えました。

**酒井** 春樹の読者の七割は、女性読者だっていうからね。

**高野** はい。なので、私は、春樹は、無自覚に書いてはいない、という考えです。春樹は、厳然と存在する、ジェンダー構造を、しっかりと自覚している。そして、それがいかに強固で、そう簡単に、崩れるものではないということも、知っている。そして、また、自分は、権力を持つ側である、男性共同体の一員であるっていうことも、わかっている。全部承知したうえで、春樹は、書いているって、私は思いますね。ちょっと、買い被りすぎでしょうか（笑い）。そういう、いわゆる、加害者側にいるっていうことを、男である自分を、決して棚に上げたりせずに、この『国境の南、太陽の西』の、始にしる、『ノルウェイの森』にしる、男たちの姿を、まるで、自分をさらすような気持ちで、結構、痛い思いもしつつ（笑い）、あらわにしているんじゃないでしょうか。愛だの恋だの、軽薄っぽく書いているように思っています、実は、非常に、シニカルに、冷静に、現実を、男／女の現実の世界を、描いていると思います。それは、結構、きついことだと思えます。男同士の、いちゃいちゃした（笑い）、友情とか、書いているほうが、ずっと、楽しそうに、感じますよ、私は（笑い）。そういう意味では、そのような、居心地のいい、ホモソーシャルな世界観を、春樹は肯定しているな、とは思いますが（笑い）。